

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	第四の男 <一般>
Author(s)	アサーナス, ; 岡野, 純
Citation	広大言語 , 8 : 39 - 45
Issue Date	1968-12-10
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046292">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046292</a>
Right	
Relation	



は使わないような表現があるであろうか。この点何故このような分野に俗語が生じたか、その発生使用範囲など、日本語や他の言語と比較しつつ研究すれば面白いと思う。しかし俗語 (mots vulgaires) の中には、日常語 (mots familiers) に近いものから隠語 (argots) に近いものまであり、事実上に挙げた例の中にはフランス人が argots あるいは expressions argotiques と指摘するものも含まれている。(しかし、ここでは argots を非常に狭義に限定し「俗語」という語は広義に用いている)。そして一つ一つの俗語についてそれぞれその用いられる範囲が年齢、性別、その他により異っていると云ってもよいくらいであるので、ここでは俗語についてこれ以上詳しくはふれないことにする。

## 第 四 の 男

ア サ ー ナ ス  
岡 野 純 訳

コンドラス家の娘は大変な間違いをしでかした。二十二才の無分別でコスターキス・ドゥーカスを恋し、ある冬の夕暮れ、城跡のとある道はずれのものかげで彼に身を萎ねたのである。そのあやまらに気づいて彼女は、八日の中に自分を兄たちに貰いに行ってくれるようにとコスターキスに求めた。そして八日経っても彼がそうしないのを知り、それどころか故意に彼女を避けるのを見て、彼女は躊躇することなくすべてを母親に打ち明け問題の解決をえようとした。兄たちは激昂した。すぐに彼女を殺すことを要求した。そしてほんとに殺したかもしれない。しかし母親が気を配って彼女をその姉の許へ逃してやった。『不明者がこの家に二度と踏み込まないように、やつをぶち殺してやるんだ。』

『やつを串さしにしてやる。』

『生きてままだつ髪の毛をむしりとりてやるんだ。』兄たちはみな口口にむごい殺し方をしそうな様子を見せた。ただ一番下の、つまり四番目の弟だけは一言も言わず、今まで見たこともないわが家のはげしい嵐を目にしなが、全身をわななかせつつ部屋の片隅にうずくまって泣いていた。彼は十六才の少年で、誰もこの子供には注意せず、臆病な涙のほかにはこの子から何の助けをも期待してはいなかった。

長兄のソティーリスは、コスターキスをつかまえて三日以内に、傷つけられた妹と婚約するようきっぱりと要求しようと決心した。

もし拒絶したならばその時には他の解決法をとろう。コスターキスは父親のない金持息子で、夫

の財産を夫が生きていた時よりももっとうまく管理している抜け目のない未亡人のひと粒種であつて、自分の意見も意志ももたない男であつた。今ではもう二十五才にもなるというのに、母親の言う通りにしか言いもせず、しもしなかつた。彼女が欲するとき、欲するところで、欲するように、彼は生活を楽しんだ。彼女が選んだ友達とつき合い、彼女がしつらえた通りの人生を生きていたのだ。何でも母親の言うなりになり、何を心配するでもなく、自分の財産に関しては母親の単なる使用人であるにすぎなかつた。はじめての自由な、自発的な、母親にかくれての行為がフォティニーとの恋であつた。恋は、隷屬せしめられた少女たちや服従を強いられた少年たちの鎖をつねに打ちくだくものである。はじめて自由が獲得されたとき、何も思慮せず、何ものにも補われぬのが自然のなり行きであつた。悪いことが起つた時、というよりは悪いことが起つたと感じえられるようになった時、これは大変だと思ひ、非常に重大な予感が心に浮ぶのに気づいたが、そのことで頭を悩まそうとは全然思わなかつた。悪事は運命の巨大な不同意を受けとりつつあつた。そして誰しも計画や計算や策略なしに運命には身を委ねねばならないのである！ フォティニーが彼に期限を課した時、彼は八日という日がいつ過ぎるか待ち遠しくてならなかつた、何となればその日々つつづいていく間ずっと、彼はこの問題を全く考えたくないのに、しかもいつも考えていなければならなかつたからである。八日間の日はまさに過ぎようとしていたが、何らの決定的な解決をもたらさうになかつた。馬を外へ曳き出して自分の地所へ出かけた。人夫たちは葡萄の刈込みをしたり、葡萄の樹のまわりに穴を掘つたり、あるいはとうもろこしを播くために畑を耕したりしていた。彼は開けた田野に或る慰めを見出した。彼は我を忘れて、一箇の微小な生きもの、馬が踏みつける蟻の一匹や、彼の眼のまわりをぶんぶん飛ぶ昆虫の一匹やらの単純な動きに心を奪われている。

ソティエリスが彼をわざわざ呼び出した日、彼の予感はより深刻となつた。彼は、自分は何も知らない、しかしあなたの妹はほしいし、母親もきっとそう思うだろう、ほかにどうしたらいいものか……といったようなイエスともノーともつかない返事をした。

— そんなことは男同志の話し合いではない！……だがお前がおれたちにしたことは男としての、全く以て男のしてかした事だ……おれはお前のお袋には何の用もない。お前に用があるんだ……おれたちの妹との婚約を三日待つてやる。いやなら、おれたちは三人だ……一人欠けてもだ、とてもお前はこの世には入れられないぞ！

— きみはぼくをおどすのか？

— いいや、そうじゃない。このような問題ではおどしはきかない！……お前の思う通りにさせてやる、ただ警告しておくが……

— きみが言うことは何も認めない……

——じゃあ、妹がおれたちをからかっているのだ、とするとおれたちはまずあいつをやっつけなくちゃならん……

——ちがう！ ちがう！ お袋が認めてくれるなら……きみの妹をほくはもらうよ。

——お袋だって？……そんなものはおれは知らん！ 三日間婚約を待ってやる。ほかの言うことではない！

三日の間、何ともなりようがなかった。彼はそのことを母親に言わざるをえなかった。

——ねえ、母さん、ほく結婚したいんだ？

——今夜にでもそうあってくれればいいよ、お前。

——嫁さんを見つけなくちゃならぬ……

——お前さんに一番いい娘（こ）を選んであるよ……

——だけど、ほくがもう選んでたら？

——その娘の名を言ってごらん。同じ人かもしれないよ……

——コンドラヌとこのフォティニーだ……

——まあ何だって！ 最低じゃないの？……この村には、いい家の、綺麗な、お金の立派なお嫁さんがいないのかしら？……

——ほくはあの娘が好きなんだ！

——まあ、一体何ていう人をお前は選んだの！……

——ほくはあの娘がとても好きなんだ！

——あんな娘はやめなさい！……つり合いません。

——約束したんだ。

——何だって？ 私に相談した？……そんなこといけません！

——ほくは縛られてるんだ……

——ほっておきなさい！……できないこと、できないことだから！

——あの娘をほくのものにしちゃったんだ！

——お前が？……お前がかい？……誰がお前の言うそんなばかなことをお前に教えたの……その娘がかい？……やめてちょうだい！人をばかにしようとしているんだよ……

——あの娘の兄弟がそれを知ってるんだ……

——怪かの男を引っかけたらいいんだ！……お前はあんなつまらん家の者にはそぐいません、絶対に！……

——僕を殺すかもしれんよ、あいつらは！……

——お前をかいは？……そんなやつらは神様がお殺しになるように！ いい加減なことは言わないの……葡萄畑へ行きなさい、そんな馬鹿話はやめて……私の息子を殺すだなんて？

——お母さん、あいつらは僕を殺すだろうよ！……

——人殺しだよ、そんなこと……何を言うの？……子供じゃあるまいし……誰が私の息子にさわろう！……何を言うことやら。

こうして母親は、自分の一人子を巻き込もうとする不正と不幸、自分のコスターキスに不名誉な網を仕かけた悪い一家、魔法と薬草とで大事な息子を誘惑しようとしたいたずら娘などのことを、おしゃべりと威嚇とで、町中、近隣中に言いふらしはじめた。戸口から戸口へ、巷から巷へ、隣人から隣人へと、その噂はあたり一帯にひろがり、三日の中にコンドラス家の人々は、結婚指輪の代りどころか、世間の嘲笑の声と侮蔑と恥辱とを受けたのであった。三日目のこと、彼らの母親が水を汲むために泉に出かけたところ、ほかの主婦たちは声をひそめて笑った。

——フォティニーちゃんはどこにおいでかね？ と或る生薬屋の家内が狡猾げにたずねた。

——今日はあれの叔母のところに行ってるのだよ。

——叔母さんのところって？ 世間ではあの子が旅に出てると言ってたよ……多分婚約のためだろうて……

——みんながそんなことまで言ってるの！……

——こうも言ってたよ、たぶん私の教母様のドウフェナスさんとこのコスターキスが娘さんを貰うんだって、と今一人の女が言った。どう？ コスターキスよ！……

——だって、あの方はいわば王子様じゃないの？

——そんなことないわ……でも娘さんを貰わないだろうよ。

——それでお前さんなぜそんなこと知ってるの？……

——お気に障った？……娘さんを貰わないだろうということが？……

——お前さん、うちの娘に対して何て失礼な！……あれのことをとやかく言う資格なんかありませんのに！ ええ？

——私たちがあのことを知らなければね！

——何を知ってるて言うの、馬鹿ものが、え？

——世間は耳もってるからね……

——息をとめてやるよ、このアホウが！

錫器も、水差しも、水入れも、みんなひっくり返った。髪が引っぱられ、頭巾がひき裂かれ、ほったからには血が流れた。大変な騒ぎだ。

そのことが子供らの耳に入った 《生きちゃあられない!》 妹がもられる見込みのないことは明らかである。三日目も何の連絡もないままに過ぎた。

— あの子をもらうと言うのを聞いたかい? お前たちが馬鹿にされてるんじゃないかい……今日みんな世間に言いふらされてしまった……と母親は言った。お前たち何をしたらいいか、それだけを考えるんだよ……

夜であった。暖炉で火がパチパチと燃えていた。時々強い焔があがった。戸外では北風が吹き荒れ、海の遠鳴りが恐ろしげに闇の中を伝った。母親は木箱にうずくまるように腰かけていた。三人の兄弟は背をのばしてズボンのポケットに手をつこんだまま部屋の中をあちこちと行ったり来たりした。彼らの影が絨緞や、壁や、家具の上にゆがんで映った。古い反った床が彼らの歩くにつれて軋んだ。

— みんなでくじを引こう、と長兄が言った。

— 三人で行こう、と次兄が言った。

— 明日まで待とう、と三番目の兄が言った。

— 何を言ってるの!……男が三人もいて! と母親は言った。泉のそばでひどい目に逢って、私はもう我慢できないよ。三人も男がいて!……

《三人じゃない……僕たちは四人だ!……》

十六歳になる末の弟のレフテリスはこう声をかけようとした。彼は部屋の隅の床の上に坐って全身をわななかせながら憤激して泣いていたのである。彼は今にも声を出そうとした。しかし歯ざりをしている兄たちを見て彼は差し控えた。彼らはこの弟のことを全然頭に入れていなかったのである。彼が何を言おうと誰も聞きはしなかったであろう。すんでのこと叱りつけたであろう。断え間なく神経質に歩きまわり、歯を鳴らし、こぶしを握りしめている兄たちを彼は見つめた。また彼は、息子たちを何か奇妙に権威と平静さで見ている母親を見つめた。

— 明日まで待とうと言うのか? と長兄が言った。

— 待ってみよう、と次兄が言った。

— 明日の晩くじをひくのか? と次の兄がたずねた。

誰も答えなかった。母親は疑わしげに三人ともを見つめた。レフテリスも同じことをした。彼は母親の考えを感じとっているかのようであった。

— 何を言うの!……男が三人もいて……と母親はまたも言った。

— なぜ勇気を出さないんだ?……とレフテリスは言おうとした。しかし突然火が赤い焔を放ち、それが彼の精神の奥の方ではげしく輝いた。彼は何も言わなかった。

レフテリスは小さい時から鳥獣を追うことが大好きだった。彼は石投げ器でオリーブの木にとまっている小鳥をうち落とした。彼の家の庭にはつねに菩提樹の枝の柵やわながしかけてあった。大きくなった今では兄たちの二銃身の獵銃をさえいじるようになっていた。始めは全くこっそりとであった。それから母親だけの不承不承の許しを得てである。いつか彼が二羽のうずらを射殺したとき、兄たちもそのことを知った。

—— 一時間でひん曲げたりしないように気をつけるよ、と兄たちはからかって言った。

丁度その頃、彼は川の堤のあたりの氷った沼水におおいかぶさった柳の木の間やましぎをうちによく出かけていた。あの翌朝、彼はコスターキス・ドゥーフィスが自分の地所の方へ馬に乗って出かけるのを目にした。彼は立ちどまって、コスターキスが何の警戒の心もなく通りすぎて行くのを見た。長い時間、沼のほとりをうろつき廻った。凍てついたこまかい砂の上に、やましぎがその口ばしであけた沢山の小さな穴があった。彼の前には余り人が通っていない！一羽も撃てなかった。馬に乗った一人の男が中に入って来て、それに向って彼は弾を向けた。当たるといいが！

その晩、家では同じ光景がまた起っていた。三人の息子たちが集った時、母親は煖炉の火をつつきながら、息子たちの方を見ないでたずねた。

—— どうしたもんだらうね？

—— 今夜くじをひこう……と一人が言った。

—— くじをひこうとひくまいとだ、と今一人が言った。われわれの中の一人が行くといひんだ……誰でもいい！

—— 何と言うことを……お前たち男が三人もいて！と母親は同じ言葉を機械的にくり返すのだった。

—— くじを三本作って下さい、と長兄が言った。

レフテリスが連発の獵銃をもって入って来た。最後の言葉を聞いて兄たちをさげすむように見つめた。

—— くじは四つあったんだ！ と彼は言った。そして僕のが当たったんだ。

母親は手に火のついた薪を持ったまま煖炉の傍からとびのいた。三人の兄たちは狼狽してそのあとにつづいて歩いた。

—— 何だって？

—— あいつが地所から戻って来た時、獵銃で殺してやったんだ……《お母さん……フォティニ》って馬から落ちる時、あいつは叫んだ……

—— まあ、お前が！

母親は薪を煖炉に落とし、かけよってレフテリスを抱きしめ、強く接吻した。

——おれたち、みんな、じきに捕えられるだろう……と長兄が言った。おれたちがお前をけしかけたんだと世間は言うだろう。

## アサーナスについて

アサーナス (G. Athanas —— 本名は Georgios Athanasiades-Novas) は 1893年ナウパクトスに生まれた。法律を学び、短期間弁護士を業としたのち新聞界に入り、「アクロポリス」紙其他で文筆をふるった。その後政界に進出、国会議員、同議長、文部大臣、その他を歴任した。しかしアサーナスがその天分をより多く發揮したのは文芸方面である。彼は少年時代より文学に興味をもち、早くより文学活動を始め、詩に小説に劇に批評にと多方面の活躍をした。彼の表現の方法は平易簡明、その創作精神はつねにギリシア民族の生活と伝統、ギリシア国土の風物からインスピレーションを得ており、いかにも民族的作家と称してよい。ここに訳出された短篇にもそうした彼の作風の一端をうかがわせるものがある。短篇集 *Deka Erotas* は 1933年にアカデミアの賞を受け、彼の作品で外国語に訳されたものも少くない。1956年にはアテネ・アカデミアの会員に選ばれ、1965年にはその院長となる。現代ギリシアの政界、文芸界の大御所とも言うべき存在である。(J.O.)

## 英語の散歩道

丸 山 幹 正

僕の育ったのは港町であった。歩いて一分もかからない所に、かなりの荷揚げ波止場があって、どこからともなく入港しては出て行くドンガメ船(例の材木製の不格好な船をこう呼んでいた)を朝早くから眺めては興がっていたのを思い出す。船の男達は、入港する際、ひしめきあって停泊する船と船との僅かな間隙にもぐり込むべく、いつもながら悪戦苦闘するわけだが、その時毎度のよりに発せられるのが、ゴーストジを掛ける! ともを見る! というものだ。ゴーストジというのはその状況からして、船のスクリューを今迄の前進から急激に後進に切り替えて一挙に船を止めてしまう事だとはわかっていたが、これはついこの間まで、その際にエンジンの発する擬声音とばかり思いこんでいた。ところが辞書に *Go astern!* (後進!) とあるのを見つけ、なるほどと思っ